

障害児のきょうだい関係と養育態度との関連性 —遊び場面に見られる相互作用の分析から—

石川 清美

広島県立保健福祉短期大学看護学科

抄録

障害児のきょうだい関係の特徴を明らかにする目的で、遊び場面で見られる相互作用の特徴について検討した。その結果、障害児とその同胞の相互作用の特徴は、健常児対照群とは異なり出生順位に関わらず、また障害の種類に関わらず、同胞の方が障害児に働きかけ、障害児がこれに応えるという構造を示した。その傾向は、障害児が年下のきょうだいで顕著であった。しかし、障害児が年上の場合には、きょうだい間での役割行動の逆転は明らかには認められなかった。むしろ年上の障害児が、同胞と対等に関わろうとしていることが推察された。また、S-M式社会生活能力検査の結果と合わせて考察すると、年上の障害児は彼らの生活過程の中で、相互関係の能力を高めていると考えられた。

キーワード：障害児，同胞，相互作用，遊び場面

はじめに

家族の中に障害児がいる場合には、一般的に見て障害児が家族の中で最も重要な位置を占めやすい。特に乳幼児期の障害児は健康状態や機能が不十分であり、両親の視線は障害児に集中せざるを得ない。時間的にも心理的にも両親は、障害児を中心に養育活動をする。この研究では、このような家族における障害児と同胞のきょうだい関係について焦点をあてている。ここでいう障害児とは、脳性麻痺やダウン症などのように身体的あるいは精神的な機能及び発達の障害を持つ子どもを指し、同胞とはそのような障害児をきょうだいに持つ子どもをいう。

このような障害児家族においては、両親と障害児の密着した関係が形成されやすい。そのために障害児の同胞は、Vadasyら¹⁾がまとめているように、この両親-障害児の関係の輪に入れない、あるいは逆に、障害児の養育者の一員として巻き込まれるといった影響を受ける。

同胞は、障害児と自分の関係で、何故いつも自分が叱られるのか、いつも留守番するのは自分なのかかわからないままに育つ。この時期に親が障害児の世話を追われ、同胞を受容することを怠ると、同胞は情緒的な問題を起こすといわれている。同胞はその心理的な不安定さを反映して、きょうだいへの敵対行動や障害児と母親の中に割り込もうとする甘えや、癩癩などの情緒的な行動を生じることが指摘されている。このような指摘について、実際の日常生活の中では、どのようなきょうだい関係として現れるのか。きょうだい関係をきょうだい間の相互作用行動の観察から検討することが試みられている。Brodyら²⁾は、きょうだいの中で、年下の同胞

が、年上の障害児に代わって役割をとることを指摘している。また年齢が上がれば、この状況は顕著になると指摘している。Debraら³⁾も同様の観察をしている。その結果では、同胞は養育的な行動は多いが、Brodyらの言うようなマネージャーの役割や命令は見られなかったとしている。我が国では、京林ら⁴⁾がダウン症児の事例報告の中で、学齢期前期のきょうだいではBrodyらと同様の結果が見られたとしている。しかし、我が国では障害児きょうだいについての研究はまだ少なく、特に直接関わりの場면을観察して、きょうだい関係の特徴を検討した研究は殆どない。

そこで本研究では、障害児とその同胞の遊び場面での相互作用の分析により、先行研究で報告されている健常児と異なる役割を確認した上で、きょうだい関係での役割について社会生活年齢や日頃の母親の養育態度と同胞の行動特性を合わせて、障害児きょうだいの相互作用の特徴について検討する。

対象及び方法

1. 対象

調査対象は、幼児期から学齢期の対象群（障害児とその同胞）として、障害児-同胞群（障害児が年上）6組、同胞-障害児群（障害児が年下）5組の計11組である。対象児の内訳を表1に示す。対照群（健常児のきょうだい）として性別及び年齢をマッチングさせた11組を使用した。障害の種類別には、ダウン症児が5名、脳性麻痺児が6名いる。平均年齢は、障害児は5才7ヶ月、同胞は6才1ヶ月であり、健常児5才7ヶ月である。

表1 調査対象

	対象児群				対照児群				
	障害児			同胞	健常児 (下)		健常児 (上)		
	性別	年齢	病名	性別	年齢	性別	年齢		
障害児 - 同胞群	男	5:04	ダウン症	男	3:08	男	3:05	男	5:05
	男	6:05	ダウン症	男	3:00	男	3:09	男	6:07
	男	6:05	脳性麻痺	女	3:10	女	3:01	男	6:00
	男	8:07	脳性麻痺	男	6:01	男	5:07	男	7:06
	女	6:01	脳性麻痺	男	5:00	男	4:10	女	6:01
同胞 - 障害児群	男	5:07	脳性麻痺	女	7:00	男	6:01	女	7:10
	男	6:01	脳性麻痺	女	7:10	男	5:06	女	8:01
	男	7:03	脳性麻痺	男	8:02	男	7:00	男	8:00
	女	4:00	ダウン症	女	6:06	女	4:07	女	7:01
	女	4:10	ダウン症	女	10:05	女	4:08	女	10:07
	女	8:03	ダウン症	男	10:01	女	7:03	男	10:07

2. 方法

1) 遊び場面における相互作用行動の分析

観察は、障害児が通院している病院内の一室で行い、場面はおもちゃを使った遊び場面とした。入室時には10分程度のアニメのビデオを見せ、また全場面を通じて音楽を流した。きょうだいが場所に慣れ緊張がほぐれた後、きょうだいで相談しておもちゃを選び、20分間自由に遊ぶように説明した。おもちゃの種類は、プラレール、積み木ブロック、ままごとセット、絵本を用意した。

全場面をビデオ撮影し、導入終了後から15分間の場面で見られた全ての会話と行動を記録した。そしてその記録から、相手に働きかけた会話や行動および、それに対する反応としての会話や行動を、相互作用行動として抽出した。抽出した相互作用行動を機能的側面から分け、京林らを参考に著者が独自に作成したカテゴリーに基づいて分類した(表2)。それぞれの行動の出現頻度を算出した。予備調査と本調査の2回観察し、予備調査の段階で観察者間でのカテゴリー同定の一致率は87%以上であることを確認した。分析には本調査の15分間を用いた。観察された行動について、それぞれの群間に違いがあるかどうかについては、 χ^2 検定により各2群間の独立性を検定した。

表2 相互作用行動カテゴリー

A. 起因行動 (働きかける行動)		B. 反応行動	
意 図 的 行 動	1. 要求・依頼行動 物を要求する、依頼、哀願する 援助を要求する 行動を要求する	応 答 行 動	1. 積極的受容 同意、賛成、了承する 働きかけの内容の確認をする 同調、協調した行動をとる 新しい提案を返す 求めに応じた援助をする
	2. 確認行動 (意見や同意を求める) 相手に質問したり、意見を求める 自分の考えを提案し同意を求める		2. 消極的受容 相手の行動に注目する、見守 相手のなすがままに従う
	3. 伝達行動 (提示や演示により知らせる) 提示して知らせる 演じてみせる、知らせる		3. 拒否・阻止 反論、否定、拒否する 相手を阻止する 体を使って攻撃する
	4. 指示・強制行動 指示、命令、攻撃 禁止、独占する、攻撃する		
	5. 援助行動 世話をする、助ける		
無 意 図 的 行 動	1. 無意図的行動 働きかけを意識しない行動	無 応 答 行 動	1. 無応答 無反応もしくは無視する

2) 社会生活年齢の検討

相互作用における障害児の能力を考察するため、新版S-M式社会生活能力検査 (三木⁵⁾) を使

用して社会生活年齢を算出した。検査用紙の記入は母親に依頼した。

3) 日常生活における同胞の行動特性と母親の養育態度の検討

日常生活における同胞の行動特性と母親の養育態度を考察する目的で、母親に質問紙調査を行った。内容は、田研式親子関係検査⁶⁾をもとに作成した25項目 (4段階評定)、障害児に対する同胞の役割意識10項目 (2段階評定)、および同胞に見られる問題行動に関する質問25項目 (2段階評定) である。

結果

1. 遊び場面での相互作用

相互作用出現頻度は、対象群386と対照群383で両群ほぼ同数であった。一組あたりの出現頻度をみると、対象群では、障害児-同胞群では平均29.3であり、同胞-障害児群では平均42.0であり、障害児が年上の場合には相互作用が少ない傾向が見られた。障害の種類の違いによる差は見られなかった。

相互作用の出現割合のまとめを図1に示す。全体的に見ると「起因行動 (働きかける行動)」では、「意図的行動」の割合が多く、「無意図的行動」の割合は少ない。「起因行動と反応行動」の出現の割合を見ると、同胞-障害児群と対照群では、年上のきょうだいが働きかけており、年下のきょうだいがこれに応えるという構造になっている。また対象群では、「起因行動」の割合は、同胞が高くなっている。障害児-同胞群では、年下の同胞が積極的に働きかけ、年上の障害児はこれに応える構造になっている。同胞-障害児群では、同胞が働きかけ障害児が応える傾向が強くなっている。障害児-同胞群と同胞-障害児群では、きょうだい間で「起因・応答行動」の割合が反転している ($\chi^2=7.7549$, $df=1$, $p<.05$)。

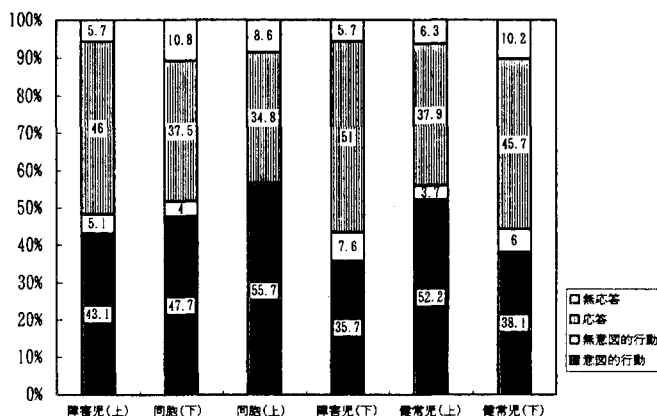


図1 相互作用行動の出現割合

「起因行動」の内容を表3に示す。「要求・依頼行動」は、障害児-同胞群、同胞-障害児群ともに、同胞に比較して障害児の方に多く見られる($\chi^2=3.9505$, $df=1$, $p \leq .05$)。「確認行動」については障害児-同胞群で、障害児、同胞ともにその比率が高くなっている($\chi^2=8.2188$, $df=1$, $p \leq .05$)。「指示行動」は、障害児(上)においても多く見られ、障害児かどうかでは無く、年上の場合に多く出現している。

「援助行動」は、障害児(下)には見られなかった。対照群では、対象2群の中間的なパターンを示している。対象群と対照群との比較で、有意差が認められた行動を次にあげる。障害児-同胞群の「確認行動」は、同胞(下)の方が健常児に比較して多く見られた($\chi^2=9.0109$, $df=1$, $p \leq .05$)。障害児(下)の「無意図的行動」が、健常児に比較して多く認められた($\chi^2=4.1932$, $df=1$, $p \leq .05$)。

「反応行動」の内容を表4に示す。障害児(上)における「応答行動」の平均出現頻度は13.5であり、障害児(下)の場合には平均出現頻度は11.0である。障害児-同胞群と同胞-障害児群について比較すると、「反応行動」は障害児と同胞の位置に関係なく、2群ともに「積極的受容」が多く見られる。障害児については、「積極的受容」がこれにつづく。「積極的受容」については、障害児に比較して同胞に多く見られた($\chi^2=6.1482$, $df=1$, $p \leq .05$)。また、「拒否・阻止」については障害児に比べて同胞が若干多いが有意差は見られない。「無応答」については同胞の方が多く見られる。次に障害児-同胞群と対照群を比較すると、「消極的受容」では健常児(上)より健常児(下)が、また同胞(下)より障害児(上)が有意に多くなっている($\chi^2=33.7562$, $df=1$, $p \leq .05$)。また

「拒否・阻止」は、健常児(下)より健常児(上)に、また障害児(上)より同胞(下)に有意に多く出現している($\chi^2=9.0109$, $df=1$, $p \leq .05$)。さらに同胞-障害児群と対照群を比較すると、「無応答」は障害児(下)よりも同胞(上)が多く、健常児(上)よりも健常児(下)に多く出現している($\chi^2=3.937$, $df=1$, $p \leq .05$)。

2. 社会生活年齢と生活年齢の比較

新版S-M式社会生活能力検査は、1935年に発表されたVineland Social Maturity Scaleと、精神薄弱者の実態調査のデータを元に1959年に作成されたS-M式社会生活能力検査をもとにしており、今日の時代に合う内容に1980年に改正されたものである。この検査は、1才から13才の子どもの社会生活能力の発達を測定するために開発された。検査項目は、日常生活の中で容易に観察できる内容で構成され、被検児の日常生活の状況をよく理解している保護者や担任教師などに記入してもらうように作成されている。検査内容は、身辺自立、移動、作業、意志交換、集団参加、自己統制などの7領域からなり、それぞれの発達段階の社会生活能力を代表する130の生活行動項目で構成されている。信頼性、安定性ともに検証されている。社会生活年齢は、社会生活能力の全体的な発達水準を見るための指標であり、対象児の発達を見る指標として使用した。

新版S-M式社会生活能力検査結果で算出した素点から、換算表に基づいて社会生活年齢(SA)を算出し、それと生活年齢(CA)とを比較した。その結果を表5に示す。社会生活年齢と生活年齢を比較した場合、障害児の社会生活年齢は低く、障害児(上)では10ヶ月、障害児(下)では2才

表3 起因行動(働きかけ行動)の内容(%)

	障害児-同胞群		同胞-障害児群		対照群	
	障害児(上)	同胞(下)	同胞(上)	障害児(下)	健常児(上)	健常児(下)
要求・依頼行動	11(12.9)	6(6.6)	14(11.8)	16(17.6)	21(9.8)	20(11.8)
確認行動	10(11.8)	29(31.9)	7(5.9)	7(7.7)	35(16.4)	26(15.4)
伝達行動	42(49.4)	44(48.4)	48(40.3)	51(56.0)	95(44.4)	91(53.8)
指示行動	11(12.9)	4(4.4)	32(26.9)	1(1.0)	41(19.2)	7(4.1)
援助行動	2(2.4)	1(1.0)	16(13.4)	0(0.0)	8(3.7)	2(1.2)
無意図的行動	9(10.6)	7(7.7)	2(1.7)	16(17.6)	14(6.5)	23(13.6)
総起因行動	85(100.0)	91(100.0)	119(100.0)	91(100.0)	214(100.0)	169(100.0)
平均起因行動	14.2	15.2	23.8	18.2	35.7	33.8

平均起因行動は一組あたりの平均頻度を示す

表4 反応行動の内容(%)

	障害児-同胞群		同胞-障害児群		対照群	
	障害児(上)	同胞(下)	同胞(上)	障害児(下)	健常児(上)	健常児(下)
積極的受容	47(51.6)	47(55.3)	59(64.8)	73(61.3)	90(53.3)	101(47.2)
消極的受容	28(30.8)	3(3.5)	3(3.3)	21(17.6)	24(14.2)	58(27.1)
拒否・阻止	6(6.6)	16(18.8)	11(12.1)	13(10.9)	31(18.3)	16(7.5)
無応答	10(11.0)	19(22.4)	18(19.8)	12(10.1)	24(14.2)	39(18.2)
総反応行動	91(100.0)	85(100.0)	91(100.0)	119(100.0)	169(100.0)	214(100.0)
平均応答行動	13.5	11.0	14.6	21.4	23.8	35.0

平均応答行動は、無応答を除いた反応行動の一組あたりの平均頻度を示す

活年齢の方が生活年齢に比較して、3ヶ月から10ヶ月高くなり、その格差は生活年齢より大きくなっている。対象群の社会生活年齢は、障害児と同胞の位置との関係で逆転している事例はなかった。

表5 社会生活年齢(SA)と生活年齢(CA)の比較

	SA	CA	SA-CA
障害児(上)	5:03	6:01	-0:10
障害児(下)	2:09	5:03	-2:06
同胞(上)	8:05	8:02	0:03
同胞(下)	5:07	4:10	0:09
健常児(上)	8:03	7:05	0:10
健常児(下)	5:10	5:10	0:00

数値は(才:ヶ月)

3. 同胞の行動特性と母親の同胞への養育態度

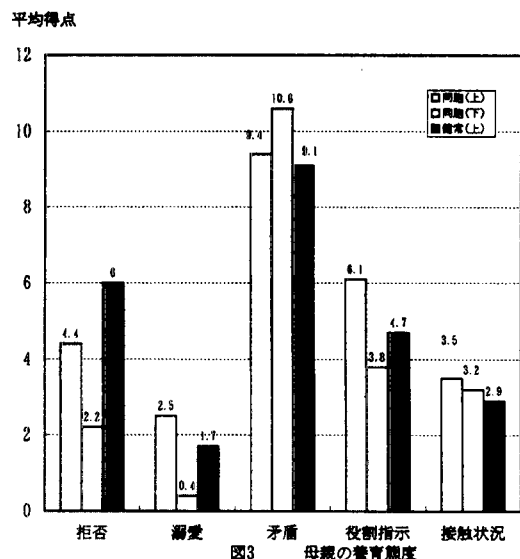
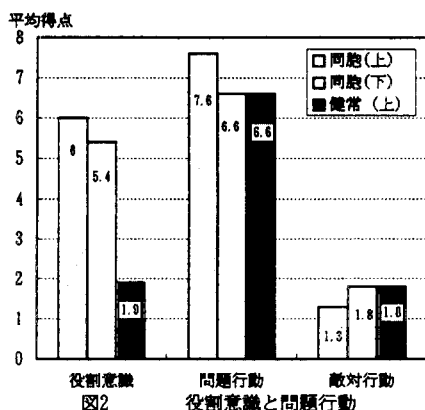
母親が日常生活の中で感じている同胞の行動特性を、田研式親子関係検査をもとに作成した。構成内容は、障害児に対する同胞の役割意識に関する項目10項目、および同胞に見られる問題行動に関する質問25項目である。役割意識の項目としては、障害児を仲間に入れて一緒に遊ぶ、一緒に連れて遊びに行く、頼むときょうだいの面倒を見てくれる、何でも一人でする、自分がしっかりしなければと思っているところがあるなどの10項目である。同胞に見られる問題行動の項目としては、年上なのに年下の態度をとろうとする、自分で出来ることも人に頼ろうとする、変わったことや目立つことをしようとする、しつこく甘える、だだをこねて自分の言い分を通そうとする、うそやいいわけが多い、すぐ腹

を立てる、怒るとものを投げつけたり壊したりする、ちょっとしたことでよく泣いている、一人で悩んでいることが多いなどの25項目である。それぞれ2段階評定して合計得点を算出し、群別に平均得点を算出した。「役割意識」および「問題行動」の平均得点を図2に示す。

母親から見た「役割意識」については、同胞の平均得点は5.8で、健常児(上)の平均得点は1.9であり、同胞は健常児(上)に比較して、多くの「役割意識」を持っていると母親は感じていた。同胞(上)の方が、同胞(下)に比較して多くの「役割意識」を持っていると思われる。また健常児(上)に比較すると、同胞(下)であっても、障害児(上)に対する「役割意識」が高いとする結果を示した。

「問題行動」についての調査結果を同胞と健常児(上)で比較すると、健常児(上)の平均得点6.6に対し同胞の平均得点は7.2であり、同胞の方が「問題行動」が多い傾向が見られた。また同胞(上)と同胞(下)を比較すると、同胞(上)の方が「問題行動」の平均得点が高かった。

母親の同胞への養育態度の調査結果を図3に示す。「拒否」「溺愛」については、同胞(上)に対する方が同胞(下)に対するよりも平均得点は高くなり、「矛盾」についてはほぼ同じであった。同胞(上)と対照群とを比較すると、障害児の母親の方が「回避」の得点は低く、「溺愛」「矛盾」では少し高くなっていた。同胞の世話などの役割指示をどの程度しているかについては、同胞(上)と対照群とを比較すると、障害児の母親の方が多く依頼していた。子どもとの接触の程度については、同胞(上)に対し3.5、同胞(下)に対し3.2、健常児(上)に対し2.9と同胞に対して平均得点が少し高かった。



考察

相互作用行動の頻度は、障害児-同胞群は他の2群に比較して少なくなっている。これは他の群では健常な年上が「起因行動」をとるが、障害児は積極的に働きかける行動が少ないためと思われる。また、「起因行動」と「反応行動」の出現率では、先行研究であるBrodyら、京林らと同様の結果を得た。つまり、障害児のきょうだいでは、出生順位に関わらず、また障害の種類に関わらず、同胞の方が障害児に働きかけ、障害児がこれに応えるという構造が見られた。これに対して対照群では、健常児（上）が、働きかけた行動「起因行動」は多くなり、健常児（下）はこれに応えると言うきょうだい関係の縦の構造が現れていた。

Brodyらは、遊び場面の観察を通して、発達遅滞児とその同胞16組と対照群を比較している。発達遅滞児の年少の同胞は、対照群には見られない「援助、教示、指示」といった障害児を先導する役割の逆転が見られた。そしてそれは、同胞の年齢が高いほど大きいと報告している。京林らも、発達遅滞児とその妹1組と対照の遊び場面での相互作用を観察し、働きかけとそれに対する反応行動を分析し、発達遅滞児には「無意図的」行動が多く見られ、対照児のような姉から妹へという意図的な働きかけの行動は見られないとしている。

本調査でも、同胞は、援助行動や支持行動をほとんどしていない。しかしそれは、同胞（上）の場合でも同じであった。むしろ障害児（上）であっても、援助行動や支持行動は、同胞より多く見られた。また障害児（上）の「起因行動」は、他の群よりも少ないが、先行研究のような役割の逆転といった明確な違いは見られなかった。むしろ障害児（上）には、積極的に相手に伝えようとしている行動が観察された。

障害児（下）には、「援助」行動や「指示」行動が多く見られた。この場合障害児には「反応行動」が多くみられた。このことは遊びの場面での相互作用行動の結果が、社会生活年齢で見られた格差と一致していることを示している。

「反応行動」の中では、障害児-同胞群、同胞-障害児群のいずれの群でも「積極的受容」が多く見られているが、「受容」は、障害児の方が多く、同胞は「拒否・阻止」や「無応答」が多く見られた。しかし同胞-障害児群の場合には、他の群に比較して障害児、同胞ともに、「拒否・阻止」が多く見られていた。

Debraらは、3才～6才1ヶ月の脳性麻痺などの20人きょうだいの遊びを観察している。その報告では、障害児きょうだいの相互作用には、障害の種類は関係なく、同胞は「養育的な行動」

が多く、「命令、要求、指示」は少なく、「攻撃」はない。また指示的な役割が見れなかったのは、年齢が小さすぎたからだとしている。また性差は認められないとしている。以上のことから性差や障害の違いに見られる役割の違いというよりも、意志交換ができるかどうか、移動や作業の能力が著しく障害されていないかが影響すると思われた。

本調査でおこなった新版S-M社会生活能力検査と合わせてみると、同胞-障害児群は、きょうだい間での社会生活年齢の開きが大きく、また障害児の社会生活年齢が2才9ヶ月と低い。障害児-同胞群においては、障害児の年齢が全体的に高いことが、きょうだいの相互作用を促進させ、同胞と対等関係を維持する方向に働いている。つまり、Brodyらや京林らの先行研究との結果の違いは、これまでの研究は、いずれも少数の対象者に行われており、発達に障害のある子どもの個人差が結果に反映した可能性がある。このような場合には生活年齢での対象選択が、必ずしも妥当ではないことが示された。新版S-M社会生活能力検査は、生活年齢や知能が同程度であっても、実生活の中では違いが見られる生活処理能力を測るものである。子どもの相互作用には、生活過程の中で養われた日常生活能力が大きく影響する。特に障害児の場合にはこの影響が大きく、このような場合に、社会的な能力を測る簡便な方法として、新版S-M社会生活能力検査が一つの指標として有効と思われる。

本研究で観察された相互作用を見ると、泣く、ものを投げるといった情緒的な行動や攻撃行動は少数であり、障害児の同胞に見られる心理的な問題が、観察場面に反映されているとはいえなかった。また障害児の母親は、子どもに手が取られる分、同胞との接触は少ないであろうと考えたが、反対に子どもとの接触を心がけているようである。母親から見た同胞の役割意識や日常の行動では、健常児（上）に比較して高い結果であったが、これは母親が「役割指示」していること、つまり具体的に障害児と遊ぶことや障害児を助けるように指示していることの影響であると考えられる。これらの結果から障害児の同胞を見ると、よく親を助けてくれる、優等生的な同胞像が見える。しかし反面情緒的な問題行動の得点は、同胞（上）が高くなっており、障害児に対する敵対行動の表出は少ないが、彼らの心理面にはなんらかの負荷がかかっている可能性を示す。

三原ら⁷⁾は、発達遅滞児を持つ同胞が、障害児に対する罪悪感や葛藤で悩んでいるものと障害児の存在を受け入れているものがあることを報告している。これについてMcHale⁸⁾は、障害児の同胞は、障害児に対して憤りや悔しさを生

み出したり、親や障害児との間に葛藤を生じさせると述べている。同胞と違い、障害児は特別のニード(身の回りの世話や訓練など)を持っているために、同胞はそのことで障害児と張り合うことになるが、それは同胞に罪悪感をもたらすという。このことは同胞の不満を引き起こし、情緒的な問題の引き金になりやすい。McHaleは、自閉症、発達遅滞、健常児を持つ6才から15才のきょうだい90名について、障害の種類による影響の違いを調査している。これによると、同胞の反応では、家族の中での役割についてのみ対照群との差が見られた。また障害児に対しては、態度・役割・障害児に対する感情とともに、対照群に比較して肯定的に捉えている同胞が多く見られている。同胞の反応は全般を通して肯定的であり、障害の種類に関係なく同じパターンを示していると報告している。この点については西村ら⁹⁾も、Stoneman¹¹⁾の研究が逆の結果を出していることを疑問視している。また同胞の意識や行動に影響を与えるのは、障害の種類ではなく、むしろ生活の実際の差違からもたらされると述べている。本研究の結果からも、日常生活での母親の役割指示や拒否などの養育態度との関係が推察された。このことは日常生活の中で、母親をはじめとした周囲の大人達が自然な形で障害児や同胞との接触を深めることが重要であり、また同胞の役割負担が大きくなりすぎないことなどの養育のバランスに配慮することの重要性を示唆している。

おわりに

障害児のきょうだい関係を明らかにする目的で、遊び場をを観察してきょうだいの相互作用を分析し、社会生活年齢および母親の養育態度や同胞の行動特性と合わせて検討した。その結果、障害児とその同胞の相互作用は出生順序に関わらず、また障害の種類に関わらず、同胞の方が障害児に働きかけ障害児が応えるという構造が見られた。しかし先行研究で見られたような、年下の同胞の指示行動や援助行動は増加しなかった。

確かに、障害児が年上の場合には、応答行動と起因行動の割合で同胞との逆転が見られた。しかし、指示行動については障害を持っていても年上の役割をとっているなど、内容においては、年下の同胞との間で役割逆転は明らかには見られなかった。このことは、年上の障害児の社会生活年齢の平均値が、同胞とほぼ同じであったことの影響が考えられた。また、障害児では、出生順位によって社会生活年齢の伸びに差があった。今後の研究の中で障害児の相互作用の能力が、きょうだい関係の中でどのように

変化していくのかさらに検討を深める必要があると思われた。

謝辞

本研究をすすめるにあたりご指導いただいた元広島大学教育学部教授の清水凡生先生に深謝いたします。ご協力いただいた滋賀医科大学医学部看護学科の泊裕子助教授に深謝致します。また、調査に快くご協力頂いたご家族の皆様にご心より感謝いたします。

本研究は、平成8年度広島大学教育研究科(博士課程前期)修士論文として提出したものの一部である。また本研究は、著者の共同研究である平成7年度文部省科研費助成研究「家族看護学の視点から病障害児の入院や療育が同胞に与える影響と地域支援ネットワーク(研究代表者 泊裕子) No. 0767254」で調査した観察場面の一部を分析に使用した。

文献

- 1) Vadasy, P. F., Fewell, R. R. et al. Siblings of handicapped children: A developmental perspective on family interactions. *Family Relations*, 33:155-167, 1984
- 2) Brody, G. H., Stoneman, Z. et al. Observations of the role relations and behavior between older children with retardation and their younger siblings. *American Journal on Mental Retardation*, 95:527-536, 1991
- 3) Debra, J.L., Carol, T.M. et al. Preschool siblings of handicapped children: Interactions with mothers, brothers, and sisters. *Research Developmental Disabilities*, 12:387-399, 1991.
- 4) 京林由季子, 井田範美. 精神遅滞児とそのきょうだいの相互作用に関する事例的検討—二卵性双生児の遊び場面における相互作用の分析—. *心身障害学研究*, 16:91-99, 1991
- 5) 三木安正. 新版S-M社会生活能力検査. 東京, 日本文化科学社, 1-20, 1980
- 6) 品川不次郎, 品川孝子. TK式幼児用親子関係検査の手引き. 東京, 日本文化科学社, 4-12, 1992
- 7) 三原博光. 精神発達遅滞児とその兄弟姉妹の人間関係. *川崎医療福祉学会誌*, 4:2; 69-74, 1991
- 8) McHale, S. Sibling relationships of children with autistic, mentally retarded, and non-handicapped brothers and sisters. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 7:19-32, 1986

- 9) 西村弁作, 原幸一. 障害児のきょうだい達
(1). 発達障害研究, 18:1;56-67, 1996
- 10) 西村弁作, 原幸一. 障害児のきょうだい達
(2). 発達障害研究, 18:2;150-157, 1996
- 11) Stoneman, Z., Brody, G. H. et al. Ascribed role
relations between children with mental retardation and their younger siblings. *American Journal on Mental Retardation*, 95:537-550, 1991
- 12) 児玉省, 中村孝. 小児の問題行動. 東京, 医歯薬出版, 1-39, 1982

The relationship between handicapped children and their siblings in their rearing
—Characteristics of interactive behavior between handicapped children
and their siblings in play situations—

Kiyomi ISHIKAWA

Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

To clarify characteristics of the relationship between handicapped children and their normal siblings, characteristics of their interactions observed in play situations were studied. In the normal-handicaped sibling group, unlike the normal-normal sibling group, the normal siblings approached the handicapped children, and the handicapped children responded to them regardless of the seniority order or the type of the handicap. This tendency was more notable when the handicapped children were younger than their normal siblings. However, when the handicapped children were older than their normal siblings, no clear inversion of the roles was observed between them, and the handicapped children tried to be on equal terms with their younger siblings. When the results of the S-M test of abilities of human relations are taken into consideration, older handicapped children are considered to develop interactive abilities in their life with their younger siblings.

Key words : handicapped children, sibling, interaction, play situations